

「柏おどり」 歌い継がれ33年



歌う大月みやこ

歌詞は三氏の合作、大月みやこが歌う

大月みやこの歌う「柏おどり」が市内各地の夏祭りに流れ、それに乗って33年間も踊り継がれてきた。拡声器のすごい音量が降りそそぎ、それに合わせた強烈な太鼓の響き、歌詞など頓着することなく、ひたすら踊る。

「柏おどり」の前に「京北音頭」があった。今でも両方踊られているが、「京北」に歌われた当時の柏の姿が一変、「もっと明るく伸びる柏の晴れ姿」を象徴する歌詞を募集（柏市民新聞社）したのが、昭和四十六年のことである。

百二十数編の応募があり、三編が選ばれたが、入賞作を決定することが難しく、「それぞれの歌詞に織り込まれた郷土史的な描写や情緒、新時代的な感覚や表現をつなぎ合わせる合作」とし、さらにキングレコードの作詞家が筆を加えて発表したという。

難産というか、これを当時売り出していた白石十四男が作曲、大月みやこによってレコーディングされ、七月三日に披露会が行なわれている。振り付けは松若寿恵由。

さて、「京北音頭」で歌われた、柏の姿に合わないことが、「柏おどり」では、払拭されて新しい柏市の「晴れ姿」が浮かんできたかと言うと、そうかなあ、と思わざるをえないけれど。歌詞よりもまず踊り！ かしわでシャンシャン！

傍白 もう何年も踊りの驥尾にくっついて、「柏おどり」などを踊っているが、一向に覚ええない。師匠と勝手に思い込んでいる女性の後ろで踊っていれば、うまくいく。広い南部公園でもこの手で行くが、人の列が錯綜して師匠が遠く離れてしまうことがある。絶望である。

それに新曲が加わる。ことしは「ことぶき囃子」という。三回ほどの練習でOKというわけにはいかない。前年の復習さえまならないのである。

それでも夏祭りを踊る。筆舌に尽くせない魅力があるらしい、あるのである。たぶん、恥など吹っ飛び、自分が自分から離れて異土に立っているのかもしれない。